

# 心理療法プロセスのファンタジーとしての 「相互作用場」と「サトル・ボディ」

名 取 琢 自

心理療法や精神分析の面接では、治療者や分析家側にも様々な反応が起きる。感情やイメージの喚起はもちろん、情動や強い身体感覚をともなう反応が生じることも多い。こうした治療者側の反応は、精神分析においては転移－逆転移の枠組みから理解されてきた。患者の深層心理をキャッチするための手がかりとして治療者側に喚起される逆転移を用いる技法も洗練されてきている。

筆者はフロイトの無意識論を出発点として、身体感覚と無意識の関係について検討するなかで、意識と身体との中間領域として「身体－前意識」の場を想定するモデルを提案し、心理療法のセッションで治療者が経験する体感に注目してきた（名取，1994；Yamanaka & Natori, 1998）。

近年、アメリカのユング派分析家のシュピーゲルマンやシュワルツ＝サラントらは、分析セッション中に起きる分析家－被分析者間の相互作用に注目した相互作用場（interactive field）理論を提唱している（Spiegelman, J.M., 1995, 1996; Schwartz-Salant, N. 1982, 1989, 1995, 1998）。彼らの理論の特徴は、変容プロセスにおける分析家－被分析者の相互作用を錬金術のイメージをもとにして考察しようとしていること、そして、分析家－被分析者の二者関係だけでなく、「第三」のもの、そしてこれらを包含する「第四」のものをも導入したモデルを立て、そのなかで、サトル・ボディ（subtle body）という独特な現象を位置づけていることである。

本稿では、この「サトル・ボディ」に焦点をあてながら、彼らの相互作用場理論について若干の検討を加えたい。

## 1. 相互作用場モデル

### （1）シュワルツ＝サラントの「相互作用場」モデル

ユング派分析家のフォン＝フランツ（von Franz, M. L.）は、ユングの言う集合的無意識には「場」的な性質があり、この「場」が個人の知覚や行動や思考の形式を左右すると考えた（von Franz, 1974）。これによると、元型の布置はこの「場」の活性化の布置というイメージになる。シュピーゲルマン、シュワルツ＝サラントらは、自らを、この考え方を発展的に継承する立場として位置づけている。

フォン＝フランツは錬金術のテキストにおける「マリアの公理（The Axiom of Maria）」、すなわち「一は二となり、二は三となり、第三のものから第四のものとして全一なるもの生じ来るなり」（Jung, 1944; 池田・鎌田訳）という公理をもとにして、分析による変容プロセスを「数」の展開として捉えている。これは、シュワルツ＝サラントの相互作用場の展開モデルの土台になっている。

また、ユングが分析家と被分析者それぞれの意識、無意識という四点を相互に連結する図式を用いて、両者の間に生じる転移と逆転移を図式化したことや、分析家－被分析者双方に集合的無意識が影響を及ぼし

ていると指摘したことは周知の通りであるが (Jung, 1946)、シュワルツ＝サラントはこれらを「相互作用場 (inter-active field)」という視点から捉え直そうとしており、最終的には、マクスウェルの電磁理論とのアナロジーで「相互作用」の説明を試みている (Schwartz-Salant, 1995)。

そして彼は、ユングが投影のレベルで定式化した分析家－被分析者の相互作用を、錬金術のイメージを参照しつつ、この二者関係の足場である「相互作用場」そのものに注意を向けていこうとする。これはモデルとしてだけでなく、後述の事例にも記載されているように、実際の技法としても利用されている。

シュワルツ＝サラントによると、このような「場」の展開は次の四段階で進行する。

「第一」の段階は分析プロセスが始まったばかりで、いまだ対立物があらわれていない、混沌とした発端の段階である。分析家、被分析者ともに、秩序がはっきりしない、困惑した感覚になっている。

「第二」の段階では、一組の対立物が出現する。分析家、被分析者ともに、自分の思考、感情、感覚に気づいたり、焦点を見失ったりすることを通して、個人対個人として立ち現れてくる。分析家と被分析者が共通の心的内容を共有することもあれば、互いに相補的な位置に立つこともある。

「第三」の段階では、「第三」のもの、すなわち「場」が創造され、対立物を包み込む器となる。そして、イメージが出現してくるにまかせつつ、意識的に解釈を差し控えていると、その結果として、「場」の性質が変化してくる。「分析家は周囲の空間の手触りに気づく。場の変化やそうした瞬間の洞察の感じを正確に詳しく説明することは難しい。感覚は色彩として息づき、細部がくっきりと見えてきて、口のなかの味覚でさえ変化したりする」 (Schwartz-Salant, 1998)。こうして、二が三になる。これは解釈によって生じたのではなく、

「場」の性質が変容したためである。分析家と被分析者のプロセスを「第三」の領域で展開させることはイメージの行為であり、謎の部分をやがめずに人格の断片を収容する、器のイメージをつくるのことなのだという。

「第四」の段階は、この「第三」のものが存在の全一性に結びつく段階である。

「場」が両者のあいだに顕現することで、分析家、被分析者それぞれの内部にもこの「場」が生まれる。そしてそれまでは限界がなかった「第三」に、「第四」のものとして限界が設定され、無限の膨張をせずにするようになる。例えば、「不安」が「場」のテーマだったとすると、それまでは各々の内部にあると感じられた不安が、「場」に備わっていると感じられるようになり、さらには「場」全体が「不安」そのものになり、二人がその不安の中にあるように感じたりもする。不安が全一性感覚をそなえた容器となるのである。こういう状態を何度も行きつ戻りつするうち、「場」自体が変容していくことになる。

シュワルツ＝サラント (1998) は上記の変容過程を、正常人のなかにある精神病領域とのかかわり方をめぐる相互作用場やサトル・ボディの体験として定式化している。

## (2) シュピーゲルマンの「相互過程」と「相互作用場」理論

シュピーゲルマンはユング派分析家のなかでも、自己開示を積極的に行う独自の立場をとっている。彼の自己開示はきわめてラディカルであり、ユング派分析家としてキャリアを積んだ後にあらたにライヒ派の分析を受けたときの記録を公刊しているほどである (Spiegelman, 1992)。彼は分析家と被分析者の相互性を重視して、分析を両者の相互過程 (mutual process) であるとみなし、この視点から、精神分析、分析心理学双方を視野に入れて、相互過程の水準を次の四水準に分類した (表1)。

表1 相互過程の四水準

①伝統的な分析作業あるいは「子宮分析」
②「子宮相互作用」
③正規の相互過程
④サトル・ボディ体験をともなう非因果的場状況 (Spiegelman, 1995)

①の「伝統的な分析作業」は古典的フロイト派精神分析に相当する。関係が非対称で、分析家は患者のところに焦点をあて、もっぱら客観的な観察者となる。分析状況は患者の変容の器となり、転移の解釈がなされるのだが、分析家の「自己開示」はほとんどなされない。この非対称的な関係は、被分析者を胎児、分析家を子宮になぞらえて「子宮分析 (womb analysis)」とも呼ばれる (Spiegelman, 1992)。

②の「子宮相互作用 (womb interaction)」はクライン派や対象関係派の精神分析に相当する。夢や行動の解釈がなされるのだが、①とはちがひ、関係は完全な一方通行ではなく、時として相互作用がなされ、相互性が出現することもある。転移解釈は被分析者を主としたものであるが、投影性同一視が起きている状況では、分析家は被分析者側のところの動きを伝えるために、自分の反応を「利用」する。このため、限定的ではあるが分析家の自己開示がなされるものである。

③の「正規の相互過程」はユング派の分析に相当するとされている。ここでは、「第三のもの」として元型的布置が発生し、分析家と被分析者の間やその周囲に現れる。コンプレクスは元型的なキャラクターの形を取り、両者に影響を及ぼす。元型的水準での解釈がなされ、本格的な「自己開示」がなされうる。開示されるのは、その瞬間に分析家が体験している内容であり、とりわけ被分析者との関係で体験していることである。ここでは分析家、被分析者双方が自己の内面を語ることに開かれているので、対称性が実現されている。

④の「サトル・ボディ体験をともなう非因果的な場状況」は③にライヒ派の身体療法を加味して展開させたものに相当するものだとされている。この水準になると、分析家と被分析者はイメージを共有したり交流させるワークだけでなく、サトル・ボディ体験を通じてエネルギーの交換もすることになる。元型的な関係水準が優位になり、体験していることの相互的「自己開示」がワーク継続のために必要になる。

通常の分析や心理療法では③までの水準にとどまり、④が達成されることはまれであるとされている。

シュピーゲルマンとマンズフィールド (1996) はシュワルツ＝サラントと同様、物理学のモデルを援用し、量子力学の「場」の理論を心理臨床に応用した試論を展開している。量子論における「場」は、古典的物理学の「場」とは異なり、非因果的、非局所的な性質があり、表象として捉えられないものであるので、ユング心理学に適合する点が少なくないという考え方である。特に、時間・空間に依存しない非因果的な相関現象や存在の確率モデルは、共時的現象や、元型を確率の布置とみなす考え方によくあてはまるので、彼らは量子論のモデルとのアナロジーで、分析における相互作用や変容プロセスを説明しようとしている (Spiegelman & Mansfield, 1996)。

このようにシュワルツ＝サラントとシュピーゲルマンの「相互作用場」や「サトル・ボディ」の考え方は共通する部分が多い。シュワルツ＝サラントが「場」をイメージとして利用することを重視し、シュピーゲルマンが「場」における「相互作用」のなかで、特に「自己開示」に注目している点がそれぞれの立場の特徴であろう。

## 2. サトル・ボディとは何か

ここで、サトル・ボディとは何なのかということが問題になろう。しかし、サトル

・ボディという言葉自体がサトル、すなわち、微妙なものであり、とらえどころがないものである。「サトル・ボディ」(Tansley, 1977)と題された書物にすら、明確な定義は記載されていないほどである。この本では、物質次元とは異なる不可視の身体やそれに準ずるものをサトル・ボディとみなしているようであり、目に見えない身体イメージ、オーラ、気、エーテル体、第三の眼、生体エネルギー、チャクラ、瞑想などをサトル・ボディの具体例として取り上げている。この考え方によれば、オカルトにおける幽体やシュタイナーの神秘学(高橋訳, 1998)におけるアストラル体もサトル・ボディの近縁概念とみなされよう。本稿ではここまで広範囲のものを扱うことはせず、ユング心理学で取り扱われているサトル・ボディに焦点を絞って考察をすすめたい。

ユング心理学の文献に登場する「サトル・ボディ」の概念は少なくとも二つのコンテキストから出てきているようである。一つはクングリーニ・ヨーガ、もう一つは錬金術である。

### (1) クングリーニ・ヨーガにおけるサトル・ボディ

湯浅(1990)によれば、クングリーニ・ヨーガでは身体を次の三種類に分けて考えている(表2)。

これらのうち、②の「微細身」が文字通り「サトル・ボディ」に該当する。ここでサトルといわれるのは、この水準の身体が

表2 ヨーガの三身説

①粗雑な身体 (stūlā-śarīra; gross body)
感覚によって捉えられる肉体。物質的存在の相
②微細身 (sūkṣma-śarīra; subtle body)
瞑想修行の過程で感得することのできる微細な存在様式をもつ身体。
③原因身 (kāraṇa-śarīra; causal body)
「形成する究極の身体」超越的な神の身体。
(湯浅, 1990)

感覚によっては捉えられない無数の微細な物質からなると考えられているためである。そして湯浅によるとこれは「心でも身体でもない『第三項』と呼ぶべきものかもしれない」(湯浅, 1990, p. 304)。修行者が体験するチャクラはこの微細身に属するものとされている(本山・湯浅, 1978)。

ユングはヴィジョンズ・セミナー(1930-1934)と並行して、1932年にHeuer, W.を招いてクングリーニ・ヨーガのセミナーを行っており、表2の「粗雑な身体」に相当するsthūla相と「微細身」に相当するsūkṣma相についても言及している。ここでのユングの説明では、sthūla相は具体的な通常の知覚で捉えられるもの、sūkṣma相は抽象的で、象徴によって把握されるものとし、チャクラや宗教的象徴はsūkṣma相に属するものとしている。サトル・ボディについては「sūkṣma相は出来事の内的宇宙の意味なのであり、すなわち『サトル・ボディ』、超個人的なものなのである」(Shamdasani, 1996, p. 69)とだけ言及するにとどめ、それほど詳しく論じていない。

### (2) 錬金術におけるサトル・ボディ

錬金術におけるサトル・ボディについてユングは次のように解説している。

「我々はこのプロセス〔筆者注〕錬金術の作業に結びついたファンタジーのプロセス〕を非物質的な幻影のファンタジー像とみなしてしまうのではなく、ある種の身体的で、半ば精神的な性質を持つ『サトル・ボディ』とみなさねばならない」(Jung, 1937, par.394)。実証的心理学がなかった時代の人は活性化された無意識を物質に投影していたのであり、「この場合、半ば精神的、半ば物質的なものが組み合わせさせた現象なのである」(同)。

ツァラトウストラ・セミナー(注)ではユングは次のように述べている。物質に熱を加えると酸化して性質が変わったり、気化や昇華が起きる。これを錬金術師たちは、

火によって物質が変容したのだと考えた。そして、火の作用で外に出てきた気体や蒸気はその物質のスピリット (spirit) だと考えた。このスピリットがサトル・ボディと呼ばれたものである。そしてユングはこう言う。「サトル・ボディは熱によって生まれたので、彼らは火によって物質 (body) に火の物質を付与でき、そうすることで火の性質を帯びようになると考えたのです。『火』は魂のシンボルでもありました。ヘラクレイトスの文献には、最も高貴な魂は火のエッセンスであるという記述があります。火はもっとも強烈な光を放射するものであり、完全に乾いたものだからです。そこで彼は、スピリットや魂にとって、水になることは死を意味するのだと言うのです。… (中略) …物質に火を与えることで、それらが半ばスピリットを帯び、サトル・ボディになると考えたのです。もちろん、火は強烈さを意味します。だから、もしみなさんが強烈なことになったら、たとえば、強烈な情動に陥ったら、みなさんはサトル・ボディに変容したことになります。ですから、人間をサトルにしたり昇華したりするためには、その人を火にさらさねばなりません」(ツァラトウストラ・セミナー, 2:1067-8)。そしてユングはキリスト教のなかに根ざしている同様の考え方を指摘している。ここでサトル・ボディは揮発体 (volatile body) とも近縁のものとして扱われている。ユングはさらにニーチェの例を引き、「ニーチェがどんどん強烈になって、炎のツァラトウストラに同一化する、彼はその火にどんどん身をさらすようになり、揮発体になり、身体が燃えていきます。錬金術師たちは余分なものは燃やし尽くさねばならない、だから火の業は強力でなければならないといひます。最初は燃やしすぎないため、それほど強い火ではありませんが、最終的には火をどんどん強くして、余分なものをすっかり燃やし尽くしてしまいます。すると、それはサトル

なものになり、サトル・ボディ、すなわちスピリットになるのです。」(ツァラトウストラ・セミナー, 2:1067-8)

また、『転移の心理学』でユングはこう述べている。「したがって、無意識から自我を分離するプロセスには、mundificatio (純化) と共通の要素がある。そして、これは魂が身体に帰還するための必要条件なので、無意識が自我意識に破壊的影響を及ぼすことを予防するためには身体が必要なのである。というのは、人格に境界を与えてくれるのは身体であるからだ。自我の足場がしっかりしている場合のみ、無意識を統合できる。結果的に、錬金術師による corpus mudum (純化された身体) を魂と結合させるための努力は、自我意識を無意識との混合状態から解放することに成功した心理学者にとっても必要な努力なのである。錬金術では純化は数え切れないほどの濾過を経て達成される。これと同様に、心理学でも、通常的自我人格を無意識とのあらゆる膨張した混合状態から分離することによって純化がなされるのである。この作業にはきわめて苦痛をとまなう自己吟味と自己教育が必要であるが、しかし、これは自らその教義を会得した人から、別の人に引き継がれうるものである。この心理学的分離 (differentiation) のプロセスは生やさしいものではない。かまどの強烈な熱に身をさらしてあらゆる夾雑物を純化し、メルクリウスを『花嫁の部屋を次から次へと』追いかけねばならなかった錬金術師のような忍耐と辛抱が要請される。」(Jung, C. G., 1946, par. 503)

このように、ユングはサトル・ボディをそれぞれの元テキストの文脈にそくして解説している。物質と精神両方の属性を備えたものとすることもあり、炎によって純化された気体のイメージで語っていることもある。そして、無意識的内容が展開する場所として、身体的重要性を指摘している。

しかし、ユングはサトル・ボディに深入

りすることを意識的に避けている。あまりにも観察不可能で、科学的考察になじまない概念であったためである。ユングはサトル・ボディが時間、空間を超えた概念であることを指摘して、こう述べている。「ふつう私はこの〔(筆者注) サトル・ボディの〕概念を取り扱いません。難しすぎるからです。私は自分が本当に知っていることだけで満足です。サトル・ボディは定義からして把握しがたいものです。サトル・ボディは、時間や空間に根ざした概念しかもたない我々の言語や哲学的な視点では表現できない超越的な概念です。だから私たちがサトル・ボディの問題に突き当たると、原始的な言語でしか語れなくなるのです。そして、これは科学の枠を超えています。イメージを頼りに語るしかないのです。もちろんそういう言葉で話をすることはできますが、それがちゃんと把握できるかどうかはまた別問題です。ご存じのように私は科学を信奉しており、人間ができることを信じているのです」(ツァラトウストラ・セミナー、2: 441-5)

また、ユングはこのツァラトウストラ・セミナーにおいて、身体的無意識という概念を設定しており、シュワルツ＝サラントがこれをよく参照している。ユングはニーチェの考察のために無意識全体を「心理的無意識」(psychological unconscious)と、「身体的無意識」(somatic unconscious)の両極をもつものとして位置づけた。「ニーチェのセルフ概念を扱うためには、身体も含めて考えねばなりません。したがって、シャドウすなわち心理的無意識だけでなく、サトル・ボディという、いわば身体的無意識をも措定しなくてはなりません」(ツァラトウストラ・セミナー2: 441-5)。

以上にみられるように、ユングの態度は一貫しており、サトル・ボディという言葉に確定したイメージを持たせることをせず、元テキストや分析対象にそくして柔軟に使い分けている。そして、精神と物質の境界

があいまいになる領域に言及せざるを得ない場合にのみサトル・ボディという言葉を用いており、必要に応じて、より中立的な「身体的無意識」という概念に置き換えて扱っている。

### (3) 「相互作用場」におけるサトル・ボディ

シュワルツ＝サラントは治療プロセスを錬金術とのアナロジーで考察しており、「サトル・ボディ」もこの文脈で用いられている。彼はこう述べている。サトル・ボディは「精神 (spirit) と物質 (matter) の媒介領域であり、ここで、プロセスの『一体性』につつまれながらイメージ的洞察が活性化されるのである。この『相互作用場』は二人が無意識の二者関係として経験しうるプロセスや、この二者関係が変化し、二人が変化する様式を包含している。」(Schwartz-Salant, 1998, p.25)

さらに彼は相互作用場におけるサトル・ボディの現れ方について、ユングの身体的無意識 (somatic unconscious) を参照しながらこう説明している。「身体のレベルでは、身体的無意識は、痛み、不快感、緊張感、締めつけ感、エネルギー感、覚醒感などの身体化された (embodied) ものとして経験される。身体化されるというのは、自分の身体を特別なしかたで感じる特別な精神状態のことである。たとえば、自分の身体の大きさを意識する、ということによって身体を意識するというように。… (中略) …身体化されるという状況は、物質的身体と精神との中間に存在する媒介物の経験である。錬金術師はこの媒介物をメルクリウスと呼び、別の者はこれをアストラル体、サトル・ボディ、カバラの Yesod と呼び、ユングはこれを身体的無意識と呼んだ」(Schwartz-Salant, 1998, p.72-73)。ここではサトル・ボディは身体的無意識と同等のものとされており、また体感を通して現れるものだとされている。

一方、シュピーゲルマンはサトル・ボデ

イについてこう説明している。「身体反応だけではサトル・ボディとはいえない。サトル・ボディは意識が認識されて、その意味について省察がなされたときにはじめて発生するのである。たとえば、セッション中に私は頭痛や腹痛になることがあった。私はこれについて省察し、患者に最近同じような経験をしなかったか尋ねた。するとたいてい、そうです、昨夜になりました、とか、いま痛いんです、という答えが返ってくる。これが場なのだ。この時点で、ふつう頭痛は消失する。そして、エネルギー的観点やイメージの観点から、より深い理解に向かって進んでいけるのである」(Spiegelman, 1996, p. 170)。

彼は治療者が体験する倦怠感や抑鬱感の例もとあげている。彼はこういう感覚が生じると患者にそう打ち明けて、この感覚は二人のあいだの場にエネルギーが充填されているために生じているものだとみなして洞察をすすめていく。そうやって、二人のどちらかにエネルギーやイメージが喚起されるのを待つのである。たとえばシュピーゲルマンはこうした感覚が発生したことを患者に打ち明けてしばらくの間瞑想するという。「するととばしばサトル・ボディが出現してくる。ときにはシュワルツ＝サラントの言うように、二人の間で作用しているエネルギーが見えることもあった。私はもともとそれほど敏感なたちではないので、そうそうないことだが」(Spiegelman, 1995, p. 171)。ここでいう「見える」はイメージとして見えることなのか、実体として見えることなのかは気になるところであるが、シュワルツ＝サラントのいう「見える」はあくまでもイメージ次元のことなので、ここでもイメージのことであろう。しかし、たとえイメージとしても、「見える」というほどになるには意識状態がかなり変性しているはずである。

シュピーゲルマンらはまた、量子論の場について解説した箇所でもこう述べている。

「象徴的直観による心的機能が元型の知覚器官であるのと同様に、サトル・ボディは物理的エネルギーの基盤と結びついたところ (psyche) であり、場の知覚器官なのだ」(Spiegelman & Mansfield, 1996, p. 200)。ここでシュピーゲルマンらは身体的無意識すなわちサトル・ボディが活性化される際に、両手の手のひらが独特の痛覚を生じることが多いと報告している。さらに、サトル・ボディが物理的な身体的現象として捉えうる対象であることが証明されることをも期待している (同, p. 205)。

シュピーゲルマンのいうサトル・ボディ体験は何らかの変性意識状態をともなう身体感覚や身体イメージの体験が、分析家と被分析者のあいだで共有されたり交流されたりすることを指しており、イメージの水準にとどまらずに実体の水準で語られるように見受けられることもある。

### 3. 相互作用場とサトル・ボディの事例

それでは、相互作用場、サトル・ボディとは実際の臨床場面でどのような働きをしているのであろうか。シュワルツ＝サラントとシュピーゲルマンがサトル・ボディの例としてあげている事例をいくつか紹介する。

#### 事例1 相互作用場の例

芸術的創造性に自信がもてない女性。自分の創造的な考えを父親が躁的に横取りした体験が転移の中で再演されている、という気づきが「第三」のものとして登場していた。幼少期から、彼女が何か思いついてうれしくて父親に報告するのだが、父親はそれを全く認めてくれず、逆に父親自身の意見を述べ、たえず彼女に賛同と賞賛を求めたという。相互作用場のなかで分析家は自分のいいところを見せたり知識をひけらかしたい衝動にかられた。と同時に、彼女は引きこもり、魂にとって価値あることをうち明ける気になれずにいた。二人は彼女と父親の関係を再演していることに気づいたが、彼女はそれだけではないような気がしていた。この気づきはとても貴重だった。ながらく抑圧されていた相互作用のプロセスが活性化され

たからである。

分析家は彼女と父親との関係の知識をあえて棚上げして、何か「未知のもの」に焦点があてられるように期待して待った。こうして分析家は沈黙し、彼女が浮かんでくることを次々と語るようになった。

(Schwartz-Salant, 1998, p.66の概要)

シュワルツ＝サラントは精神分析的な転移－逆転移やその生育史上の位置づけにも目を配り、時にはその徹底操作も試みる場合もあるのだが、この事例のように、それだけでは達成できないものの存在を感知した場合には、二者関係のワークだけでなく、相互作用場そのものに関心を向けるようにとめていく。具体的には、解釈を差し控えつつ、場の展開を待つ態度を取ったのである。

#### 事例2 被分析者のサトル・ボディの例

自律性の感覚に困難があった男性。毎回、面接開始時になると生気を取り戻して「今日はわが家で目覚めました」と隠喩的に言い、いつもは「母親の家で」目覚めるのだという。この隠喩は彼自身の身体のアウェアネスが失われ、その代わりに母親の身体イメージ、または幼少期に母親との相互作用によって形成された身体イメージに、のみこまれてしまう経験をしていることを表現していた。「わが家」とは彼自身の身体のことであり、そこで目覚めたときは仕事のことを冷静に考えられる。しかし、同じ内容でも、「母親の家」では圧倒的、迫害的なものになる。…このように、コンプレクスがサトル・ボディの形をとるのである。

(Schwartz-Salant, 1998, p. 73の概要)

ここでは、被分析者のコンプレクスが「家」というイメージの形式になり、それに身体イメージが託されたことで、サトル・ボディ体験になるということである。この事例では分析家や被分析者の身体感覚について詳しく述べられていないが、事例に先立ってシュワルツ＝サラントはこう述べている。「身体化する (to be embodied) ということは、サトル・ボディを体験することである。そして、あらゆるコンプレク

ス、すなわち、共通の感覚トーンに特徴づけられ、ひとつの元型的基礎に根ざしている無意識における連想群には、サトル・ボディがあると云える。コンプレクスが布置すると、その身体は、程度の差はあるにせよ、自我の身体を接収してくる」(同)。

この場合、サトル・ボディは臨床場面で経験するあらゆる身体的現象を含むものになりかねないほど概念が広がっている。しかし、筆者には、これだけではサトル・ボディと言う必然性はいま一つ感じられない。

#### 事例3 (サトル・ボディの例)

手術を控えた女性の事例。彼女は身体について生き生きと語り、分析家にもよく伝わってきた。分析家には彼女に乖離はあるとは全く感じられず、彼女の身体は健康だと感じたほどだった。…(中略)…しかし、性的なことが話題になったり、夢の素材として現れたりすると、それまでのよくつなっていた身体感覚が喪失した。性的なことが話題になったり連想されたりすると、別の身体イメージに交替し、空間や場の感覚は急激に変化し、エネルギーが消退し、暗く重い感じになり、関係性の感覚はなくなってしまった。この状態と以前の状態とのつながりは、こういう分裂した対立物の影響下で分析家が重苦しく死んだような感覚になっている時だけにおこった。分析家には投影性同一視の観点からこの内的状態について彼女に話しても実りがないように思えた。彼女は分析家側の態度のせいであろうのだと主張したが、分析家が彼女のシゾイド状態と彼女が自分の自我の弱さを感じることを恐れ、侮辱に感じていることを取り上げたことから、彼女が分析家を感じていた死んだような感じは、幼少期に母親に対して何度も感じていたものだったことが判明した。そして、この死んだ状態は分析家のものではなく、二人のあいだのものになった。リビドーに関連した話題の時に、彼女の身体は別の身体に替わり暗く混乱したものになるように感じていた。まるで彼女のサトル・ボディが、相互作用場を支配できる、暗黒霊に憑依されているようだった。

そこで彼女は重要な夢を見た。夢の中で彼女は暗い色の古い寝間着を着ていて、仕事に行くために起きようとしていた。しかし、寝間着は身体にはりついて脱げなかった。シャワーを浴びようと思ったが、浴びても服が重くなるだけだとわかった。この拷問のような感覚を止めるには、目覚めるしかなかった。

この夢の恐ろしい状態がしだいに明確化された。

寝間着をシャドウとみなすようなことをするかわりに、身体化されたところに焦点をあてることで、違う視点が出てきた。寝間着は彼女の母親の身体イメージであり、そこには、母親が近親相姦の被害者だったことからくる狂気や抑鬱や失望がこびりついてたのだ。母親は彼女にいつも自分に同一視するよう迫っていて、逆らったらひどく怒られそうで怖かったという。これに気づいたことで、彼女は実際に母親に従わない態度を取ることができるようになった。こうした気づきはサトル・ボディを通してなされたのである。「ユングの言うように、我々はサトル・ボディを通して無意識をより直接的に体験するのであり、これは心理的無意識よりもはるかに直接性が高いのだ」。

(Schwartz-Salant, 1998, p. 75-76の概要)

相互作用場とサトル・ボディの関係がよくわかる事例である。分析家は自分の体感やイメージから被分析者にある身体イメージの二重性を見いだしたが、二者関係の中で解釈することを差し控えて第三のものの出現を待ったのである。被分析者の夢のなかの体感が、被分析者が母親との新たな関係に踏み出すきっかけとなっている。

#### 事例4 相互作用場の変容の例

50歳の男性。年上の既婚女性との親密な関係が強い情熱や喪失感情の源泉となっていた。分析家はセッションでこの女性の話題になったとき、注意が集中できないことに気がついた。被分析者が大事な話をしようとしているらしいのだが、真実の核心から距離があるような感覚が生じ、まるで被分析者が真実の感情から身を離そうとしているように感じていた。分析家が集中しようががんばっても、注意は断片化し、話の内容がうまくつかめなかった。この女性以外の話題ではそのようなことはなかった。

どうも、身体化 (embodied) レベルから引き離そうとする恐怖とパラノイア的要素の雰囲気は漂っているらしく、分析家がこの傾向を指摘すると、被分析者は「この恐怖はどこにあるのでしょうか」と質問した。分析家は投影性同一視の兆候を認めなかったので、「私たち二人ともにあるのです」と答えた。これまでにも、被分析者が父親に感じていた見捨てられ感情について取り上げたことはあったのだが、今回はこの解釈では不十分で、二人の間の場の説明になっていなかった。

この恐怖について、分析家と被分析者は関連する神話（息子-愛人と母親-女神、竜に呑み込ま

れて粉々にされる若者など）を手がかりにワークを進めた結果、場が変化し、注意の断片化は収まった。しかしこれだけではまだ不十分で、二人の間での体験は魂を感じないものであり、浅い深いかかわらず身体化 (embodiment) が起こらないものであった。

被分析者の夢によると、彼はこの女性への情熱という蜘蛛の巣に捕らわれていた。この情熱は彼に生きている実感をもたらすものであり、ここから離れることは苦痛をとまなうものであった。しかし、この女性との関係は現実に実りをもたらす見込みはなかった。

彼の内的対象関係のみならず、現実の対象関係の分析を徹底操作することで、幼少期の父親の不在と母親への潜在的な近親相姦願望などが明らかになり、かなりの進展がみられた。息子-愛人パターンに気づき、意識化できるようになると、その女性にそれほど魅力を感じなくなり、感情もコントロールできるようになってきた。このプロセスで分析家は主観的な逆転移反応、つまり被分析者に批判的になったり、その逆に彼がこの重要な情熱に対して抱いている思考や感情を理想化する傾向、を利用して、無意識素材を統合する手助けができた。しかし、精神病的な要素を抱えるという、被分析者の治療上の要請に応えるためには、さらに錬金術アプローチ、すなわち二人が布置されている場の性質を探索する必要があった。

この「場」として、被分析者がこの女性に対して抱いている圧倒的な怒りの存在がしだいに明らかになった。この怒りは時には精神病的な水準になった。この女性を欺瞞的/理想的な存在に分裂させている点に焦点をあててワークがなされた。…被分析者はこの女性の暗い側面をみてしまうことで自分の情熱を失うことが怖かったのだ。…(中略)…何年もかけて、分析家は何度も繰り返し、注意が断片化することを指摘した。被分析者の怒りはなくなり、二人の布置の源泉としてとどまっていた。

ある日、セッション中に彼はその女性との関係を語っていた。分析家は分裂のために彼に焦点をあてにくくなるおなじみの状況に気づき、彼に、怒りが二人の関係を攻撃してはいないかと尋ねた。彼は「誰の怒りですか」と応じた。分析家のできた精一杯誠実な答えは、全然わからない、と答えることだった。二人とも、怒りが存在する一種のエネルギー場にいたのだ。

このように答えることで分析家は二人の間に、怒りの感情を帯びた「第三領域」を意識的に導入した。こうすることで、怒りの性質を持つ存在をイメージとして同定できるようになった。すると二人の周囲の手触りや空間の認識の質が変わった。これが「場」ないし「第三のもの」なのだ。我々

は「他者」が一緒にいるような感じがした。この場の性質は、二人ともに、自分の内部にも場を感じ、外部的にもその場に包まれていると感じることである。まるで二人でその場の性質を観察しているような気分になることもあった。場と自分のどちらにも主体性がありうるように感じるときもあった。そして、場自体にリズムがあって、主体-客体の間を揺れ動いているかのように見えることもあった。このように、二人ともに、その怒りが場自体の性質であると感覚的、イメージ的に認識できるようになったのである。この場は身体に貯蔵された感情を発現させていた。…(中略)…誰のものか同定しないままで、イメージ的存在を受け入れることができたのである。そして、このイメージ次元への移動によって、身体感覚が活性化された。この事例では、二人とも身体にエネルギーが充填される感覚や生き生きとした感じが共有され、身体がエネルギー場であることを意識できた。おそらく、この種の身体の体験、すなわち錬金術師たちがサトル・ボディ体験と考えていたものだけが、危険な情熱を持ちこたえる感情を創造できるのであろう。

(Schwartz-Salant, 1998, p. 93-96の概略)

少し長くなったが、原文を大幅に要約したものである。シュワルツ＝サラントのアプローチがよくわかる事例である。分析家に生起する感情を基本的には逆転移として利用する水準のワークを進めるのであるが、停滞した場合、感情や感覚に注目して「場」に注意を向けていくのである。ここでは「誰の怒りですか」という問いに「わからない」と誠実に答えることで、「第三」のものイメージを喚起することに成功している。この過程では、怒りを第三のものとして共有する体験がサトル・ボディ領域の体験であると示唆されている。

#### 事例5 サトル・ボディの例

元尼僧の例。分析家は自分が「墮天使」であるかのような感覚になった。神の意志により、天界から地上に落ちてきて、人間に転生した天使の感覚である。患者も同じような感覚を抱いていた。二人は「羽」がもげてしまっていて、肩胛骨に痛みが定着していた。こうして二人はつながり、ともに泣いた。こうすることで痛みは鎮まり、強烈なサトル・ボディと場の体験が生じた。

(Spiegelman, 1996, p. 172の概要)

分析家の身体イメージがファンタジーを伴って被分析者と相互作用を起し、体感とファンタジーが一体となった体験を共有している。シュピーゲルマンはここまで相互性を信頼し、自己開示するのである。残念ながら「場」がどんなものであったかは詳しく述べられていない。

以上、五つの事例を紹介したが、これらをもとにして考えると、彼らの言うサトル・ボディの成立条件は次のように考えられよう。サトル・ボディ体験とは、分析セッション中の、①身体感覚や感情をともなう体験が分析家と被分析者に共有されるものであり(最初は片方だけが意識している場合もあるが、それを開示することで結果的には双方に共通して発生していたことが判明することもある)、②分析家と被分析者が直接的、間接的に、相互作用場を体験しているときに体験するものである(相互作用場をイメージすることもあり、元型的イメージを共有することもある)、そして、③その体験は何らかの変性意識体験をともなうことが多い(場合によってはヌミノースな体験になる)。

#### 4. 「相互作用場」論のサトル・ボディ概念の問題点

河合俊雄(1998)は境界例など重症例の心理療法において、アニムスによる癒しの可能性を検討しているが、そこで、シュワルツ＝サラント(1989)が境界例の治療をサトル・ボディ領域での結合で乗り越えようとしていることを問題視している。「このような解決の仕方は結局はサトル・ボディという現実のイメージとの間、あるいは心理学的作業とアクティング・アウトとの間の新たな中間のものをつくりだし、実体化を行っているだけではなかろうか。」(p. 270)

これはアニムスによる純化を重視しての

批判であるが、的を得た指摘であるように思われる。

筆者の理解でも、シュピーゲルマンやシュワルツ＝サラントは、ヨーガ、錬金術、ユングの身体的無意識など様々な文脈で用いられる「サトル・ボディ」という言葉をそれほど区別せずに使い、ときには実体的なものとして扱おうとしているような印象が拭えない。シュピーゲルマンによると、シュワルツ＝サラントはこれをイメージの枠内で考えようとつとめているそうであるが、シュピーゲルマン自身は生理指標などによってサトル・ボディ現象の実在性を確認することへの期待を表明している (Spiegelman & Mansfield, 1996, p. 205)。

彼らの言うサトル・ボディはクングリーニ・ヨーガの微細身そのものでもなく、ユングが錬金術のテキストから抽出した揮発体の特徴を必要要件とするものでもない。今回とりあげた文献で見ると、少なくとも言葉の上では、彼らがサトル・ボディという事例の多くは、体感をともなうボディ・イメージ体験として理解できる範囲のものである。あえて批判的に言えば、筆者には、彼らがこれをサトル・ボディと呼ぶことで、不必要な多義性が生じてしまっているように思えてならない。度々彼らが言い換えているように、これを「身体的無意識」と呼んでも差し支えない場合には、その方が中立的な概念として記述に適しているのではないだろうか。

それでも彼らがあえて「サトル・ボディ」という言葉を使うのはやはり何らかの必要性を感じてのことであろう。これは、「サトル・ボディ」が河合の言うように「この領域が従来のイメージでの関係ではなくて、かといって『現実の』身体的関係ではない」(河合, 1998) ためであるとも考えられるし、もしかすると、言語的な制約のためにこのような現象が起きているとも考えられる。例えば、市川 (1993) が用いている日本語の「身」という言葉のよう

な、身体的実感をともないつつも精神的なニュアンスも含むような、サトル・ボディ的な領域の記述に適した言葉が欧米にはなかなか見つからないので、あえてその多義性の中にこの現象の体感を託して用いているのかもしれない。

こうした概念の曖昧性や妥当性の問題点はあるとはいえ、彼らの長年の治療経験から生み出された「相互作用場」や「サトル・ボディ」のイメージの価値が減じるわけではない。ただし、心的リアリティとそうでないリアリティの区別をどこで線引きするのかには人それぞれのやり方があるのだろうが、イメージの治療上の有効性とそのイメージの実在性はやはり区別すべきであろう。そして、サトル・ボディが相互作用場の理解に有効であるとしても、それは考察の出発点としては、彼らにとって有効な「心理療法のファンタジー」として捉えるべきであり、ファンタジーの枠を越えて実在性まで前提としないほうが慎重な態度ではなかろうか。そもそもサトルなのとは目に見えず、知覚できない神秘的な次元のものではなかったのか。

筆者は残念ながらいまのところ彼らのいうサトル・ボディを実体としてまで経験するには至っていない。筆者の能力不足のためにサトル・ボディを実体として扱えずにファンタジーのレベルにおとしめている可能性もないとはいえない。しかし、彼らの言う相互作用場やサトル・ボディは、実在するものとして捉えるよりも、治療者にとって有益なファンタジーの一つとして考えておく方がよいと考えられる。ユングのいう元型や集合的無意識といった概念も、実在性の真偽はともかく、まず治療者のいざくファンタジーとして有効性のあるものだといえよう。そして、学派や治療者の個性によって、様々な心理療法ファンタジーが存在し、その有効性が治療者と患者の組み合わせによってどのように違うのか、その実態を把握することが心理療法の重要な研

究分野になるであろう。おそらくこうしたファンタジーは治療者や患者の個性によって有効性が異なる、相対的なものだと思う。量子論に行く前に、もうすこし相対論のイメージで治療過程を考えてみてもよいのかもしれない。

### 要 約

ユング派分析家のフォン＝フランツの考え方を発展させた、シュピーゲルマン、シュワルツ＝サラントらの「相互作用場」モデルが紹介され、そこで重要な役割を担っている「サトル・ボディ (subtle body)」について、クダリーニ・ヨーガの身体観、ユングの錬金術の解説を参照しながら検討がなされた。

シュワルツ＝サラントやシュピーゲルマンのいう「サトル・ボディ」には概念規定に曖昧性があり、理論的必然性が明確でない点が指摘された。そして、彼らの言う「サトル・ボディ」の特徴として、①身体感覚や感情をとまなう体験の共有、②相互作用場の体験③変性意識体験をとまなうことが多い、の三点が示された。

また、「サトル・ボディ」を実在的次元で捉えることには慎重であるべきだと考えられ、治療者が抱く「心理療法ファンタジー」の一つとして扱うことが推奨された。こうしたファンタジーの実態について、効果の相対性をふまえた研究が必要であることも提言された。

---

(注) ツアラトウストラ・セミナーの典拠はSchwartz-Salant (1995) による。

---

### 参 考 文 献

- von Franz, M. L. 1974 Number and Time. Illinois: Northwestern University Press.
- 市川浩 1993 <身>の構造—身体論を超えて—講談社学術文庫
- Jung, C. G. 1937 Religious Ideas in Alchemy, CW12.
- Jung, C. G. 1944 Psychologie und Alchemie. Zurich (池田紘一・鎌田道生訳1976心理学と錬金術人文書院)
- Jung, C. G. 1946 Psychology of the Transference, CW16.
- 河合俊雄 1998 現代の重症例とアニムスの概念 山中康裕・河合俊雄(編) 心理療法の実例 5 「境界例・重症例の心理臨床」, 金子書房, p. 259-271.
- Leadbeater, C. W. 1966 The Chakras. The Theosophical Publishing House, Adyar, Madras 20, India. (C. W. リードビーター著 本山博 湯浅泰雄共訳 1978 チャクラ 平河出版社)
- 名取琢自 1994 身体との対話—精神と身体の間領域—, 山中康裕・岡田康伸(編) 身体像とこころの癒し. 岩崎学術出版社, p.12-19.
- ルドルフ・シュタイナー 1998 高橋巖(訳) 神秘学概論. ちくま学芸文庫
- Schwartz-Salant, N. 1982 Narcissism and Character Transformation: The Psychology of Narcissistic Character Disorders. Toronto: Inner City Books.
- Schwartz-Salant, N. 1989 The Borderline Personality: Vision and Healing. Illinois: Chiron Publications.
- Schwartz-Salant, N. 1995 Jung on Alchemy. New Jersey: Prenceton University Press.
- Schwartz-Salant, N. 1995 The Interactive Field as the Analytic Object. In: *The Interactive Field in Analysis*. Stein, M.(Ed.) Illinois: Chiron Publications. p. 1-36.
- Schwartz-Salant, N. 1998 The Mystery of Human Relationship: Alchemy and the Transformation of the Self. New York: Routledge.
- Shamdasani, S. (Ed.) 1996 The Psychology of Kundalini Yoga: Notes of the Seminar Given in 1932 by C.G.Jung. New Jersey:

Princeton University Press.

Spiegelman, M. J. 1992 *Reich, Jung, Ragardie and Me: The Unhealed Healer*. Arizona : New Falcon Books.

Spiegelman, M. J. 1995 *Transference as Mutual Process and Interactive Field*, In : *Spiegelman, M. J. 1996 Psychotherapy as a Mutual Process*. U.S.A. : *New Falcon Publications*.

Spiegelman, M. J. and Mansfield, V. 1996 *On the Physics and Psychology of the Transference as Interactive Field*, In : *Spiegelman, M.J. 1996 Psychotherapy as a Mutual Process*. U.S.A. : *New Falcon Publications*.

Spiegelman, M. J. 1996 *Psychotherapy as a Mutual Process*. U.S.A.: *New Falcon Publications*.

Tansley, D. V. 1977 *Subtle Body : Essence and Shadow*. New York : *Thames and Hudson*.

Yasuhiro Yamanaka & Takuji Natori 1998 *Humour in Therapeutic Sessions*. In : *Guy Roux & Muriel Laharie(Eds.)L'Humour : Histoire, Culture et Psychologie*. *Publications de la Société Internationale de Psychopathologie de l'Expression et d'Art-Thérapie*. p.320-322.

湯浅泰雄 1990 身体論－東洋的心身論と現代－  
講談社学術文庫

---

謝辞 本稿をまとめるにあたり、本学人間学部臨床心理学科の秋田巖先生に貴重ご示唆をいただきました。ここに謹んで感謝の意を表します。

---

*ABSTRACT*

## ‘Interactive Field’ and ‘Subtle Body’ as a Fantasy of Psychotherapeutic Process

Takuji NATORI

Recently, some Jungian Analysts such as N. Schwartz-Salant and M.J. Spiegelman have explained the process of psychotherapy or analysis by the ‘interactive field’ model, in which the ‘subtle body’ experience plays a very important role.

This paper outlines their theories and the definitions of the ‘subtle body’, comparing these with the three aspects of the body in Kundalini Yoga and Jung’s explanation of the ‘subtle body’ as it appears in the texts of alchemy.

According to the case examples by Schwartz-Salant and Spiegelman, there seems to be some ambiguity in the definition and necessity of the concept of ‘subtle body’.

The author points out three characteristics of Schwartz-Salant and Spiegelman’s ‘subtle body experience’: (1) sharing an experience with body sensation or emotion, (2) experiencing some ‘interactive field’ (directly or indirectly), and (3) experiencing some kind of altered state of consciousness (not necessary, but very common).

In conclusion, the author discusses the physical existence of the ‘subtle body’, and recommends that it should be dealt with not as a physical entity but as a phantasy of the therapeutic phenomenon. The author suggests that it is necessary to study more about such phantasies focusing upon their relativity to the individual therapist.